慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代攻戰具名稱考
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1944
Jtitle	史学 Vol.22, No.2/3 (1944. 7) ,p.39(133)- 60(154)
JaLC DOI	
Abstract	古代に於ける武器は考古學的に研究してゆくことの必要であるのみならず、また言語學的にも研究せられねばならぬ。則ち武器の構造なり系統なりはたゞに具象的方面より究められ得ると共に一面その名稱の語源的研究により示唆を與へられる所大なるものありと信ずる。此處に試みんとする研究は もとより我國古代攻戰具全般に汎つてをる譯でなく、其中のごく若干に就て管見を述べんとするに過ぎない。しかも此意見は從來の學界の通見に對し異をたてる點あるかも知れぬが、私見に對し大方の高教を切に期待するものであり、誤てる點、不備の點は之を改めるに吝なるものではない。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19440700-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代攻戰具名稱考

松本信廣

古代に於ける武器は考古學的に研究してゆくことの必要であるのみならず、また言語學的にも研究せられねばならぬ。則ち武器の構造なり系統なりはたゞに具象的方面より究められ得ると共に一面その名稱の語源的研究により示唆を與へられる所大なるものありと信ずる。此處に試みんとする研究はもとより我國古代攻戰具全般に汎つてをる譯でなく、其中のごく若干に就て管見を述べんとするに過ぎない。しかも此意見は從來の學界の通見に對し異をたてる點あるかも知れぬが、私見に對し大方の高敎を切に期待するものであり、誤てる點、不備の點は之を改めるに吝なるものではない。

一、ハラノフエ

和名抄卷五、調度部征戰具に「角」卽ち獸角を利用し、またその形に模倣して作つたと思はれる笛の名を擧げ、「兼名苑註云、角本出二胡中一、或出二吳越一、以象二龍吟一也」と云ひ、更に「楊氏漢語抄云、大角波良乃布江、小角久太布江」と註してをる。書紀天武紀には「詔二四方國一曰、大角小角鼓吹幡旗、

及弩拋之類不レ應レ存二私家一、咸收二干郡家一」とある。卽ち此樂器が軍旅に用ふるもので私家に藏することが忌まれてゐたことが明白である。大角と云ふ樂器が何故にハラと云ふ名によつて呼ばれてをるかと云ふことに就て從來說明が與へられてをることを寡聞にして知らぬ。此處に予の假說を述べ、江湖の批判を仰ぎたいと思ふ。

「角」と云ふ樂器は本來獸角より製したる笛である。支那人が之に「角」と云ふ名を與へた樣に、また和名に於ても俗に「角笛」と云ふ樣にその形狀又は質料よりして「ハラ」と云ふ名がもと角を指したものであらうと推測される。所が我國現在の語彙中には角を指すハラと云ふ名稱が存しない。然しよく考へて見ると我國に突出せるものを指すハリ（針）と云ふ名稱あり、イバラとかバラとか云ふとげのある植物名稱がある。これらは皆角を指すハラと云ふ名稱の存在を假定すると極めて話がとほりやすい。自分は、曾つて我琉球に於て芭蕉絲を指すバラオと云ふ名稱を注意し、之が南洋語に於てバナナを指す balat, balak と關係あり、バナナの實の獸角に似た所から此語はもと獸角又は象牙を指す balang, bala より出たものであらうと述べたことがある（「檳榔と芭蕉」四三・四四頁南亞細亞學報第一號所載）。もし此推測が幸ひにして正しければ我琉球語には曾つてバラと云ふ角を指す名稱があつたと考へられる。此意見を提出した時此語が琉球語だけに存するか果して我古代語にも存するか不明であつたが現在では自分は我古語中にも存在したと推定する。

そしてオーストロアジア語に於ける角を指す名稱を次に擧げてみよう。

マライ原住民	bālang（角）
	bala（象牙）
クメール	phlŭk〔bhlŭk〕（〃）
Stieng	blŭk（以下同じ）
Kaseng	blòk
Sué	bölò
Halang	milà
Sedang	bölà
Jarai, Bahnar	böla
Cam	bala
Tareng	talò
Kon-tu	palò
Chrău	bla
Boloven, Niahön, Alak, Lave	blok

此等の例から比較結論せられることは角又は象牙を指す語の根は l 初音を持ち k 終音で終る單音綴であり、それに接頭辭 ba (pa) 又は ta が附着し、前者の初音は ph 又は m となる場合があると云ふことであり、語根の k 終音は脱落する場合が多い。初音の p 又は b の前身として古代形 ᵖb（清濁の中間音）を假定なし得べく卽ちオーストロアジア語の古代形として ᵖbalak と云ふ形が復原なし得る。然してその終音 k の脱落した ᵖbala と云ふ名から獸角をもつて作成せられた笛が呼ばれたと云ふことが想像出來る。我國の大角の名稱ハラノフエ、その古代形パラノフエのパラはこれと頗る相似點の多いことが注意されるのである。

南海に於て角又は象牙を指す語の語根 la (k) は左の語と結びつけて考へられ得る。

Stieng	lok（とげ）
Khmer	ban-la（〃）
Sué	ha-rà（〃）
Talaing	ja-la (ha-léa)（〃）
Kčo	pe-lei（〃）

此等の名稱に於て語根は l＋母音＋k であり、l は或場合 r と交代し、終音 k は脱落し、母音は其場合復合母音となる。此語根に ban と云ふ接頭辭の附着したのがクメル語の形式であり、之は曾

つて ba と云ふ形式の接頭辭に n と云ふ子音が附着して復雜化したものであり、Kčo の pe-lei もそれと同系統と見られるが Talaing の ja-, Sué の ha- も接頭辭と解すべきである。さて「とげ」を指す lak その終音 k を脫落した形 la と照應すると考へられるのが、我國語に於ける

イラ　（とげ）

であらう。終音 k を喪失し、l が初音たり得ぬ性質からイと云ふ接頭辭を附したものと見られる。またとげのあると云ふ性質から左の植物名とも一脈の相關があると考へられる。

イバラ、ウバラ　（茨）

バラ　（薔薇）

卽ちラと云ふイラを指す語根に接頭辭バがつき、更にウが重加された形がウバラであり、そのバといふ接頭辭は頗るクメル語の ban-la の ban と似てをるが、恐らくその古代形は矢張り bala であらう。萬葉集卷廿には宇萬良とあり、本草和名には宇波良とあり、和名抄になると无波良となつてをるが之は安藤元次氏の云はれる如く、語頭の「ウ」が次に來る兩唇音の m 又は b に同化せられ、兩唇的鼻音の m に發音されたものと見るべきでウバラよりムバラが發生したと見るべきであらう（同氏著「古代國語の研究」一五八頁）。我國語に於ける「針」ハリ（古代形パリ）も此イラ、ウバラと關係あるものではあるまいか。卽ち突出した先の鋭いものの名を辿つてゆくと結局我國語とオーストロアジア語との著しい相

似に氣がつくのである。我古代語に角を指すパラと云ふ語が存し、恐らくは同型異義の「腹」パラと云ふ語との混同を避ける爲其使用が廢れ、僅かに樂器「大角」の名稱として殘存したのではあるまいか。

二、タ　テ

盾は我國古代に於て手に持つ小形の盾よりも比較的大形の列立せしめるものが行はれたらしいと云ふことは考古學者の認める所である。此事はタテと云ふ名稱の起原を攷究する場合に示唆を與ふるものである。世界に於ける盾の構造が圓形と方形とに二大區分せられることは、民族學者の認める所であり、方形のものは東南アジアより南洋にかけ分布してをり、我國の盾は方形の部類に屬してをる。方形の盾の方が列立せしむるに便利であることは云ふまでもない。卽ち「タテ」の語原が防禦用として立てつらねる性質より起つたと見る考古學者の說は當然であり（末永雅雄氏「日本上代の武器」三三一頁）、自分も亦「立つ」と云ふ語の名詞形「タテ」が此名稱の起原になつたと信ずる。

所が我國語に於ける「立つ」と云ふ語はオーストロアジア語の次の語と似てをる。

マライ原住民　tĕ-töt, tĕ-tud（立つ）

tud（とまる）

Bahnar　　dŏt (〃)

此等の語に於て語根は t (d) で始まり、同じく t (d) で終る單音綴である。國語のタツが之と同系統であるとすると同じく「盾」タテは南方と共通の語根と關聯を持つものと見るべきであらう。和訓栞は「盾を訓ずるは隔の義なり」と云ふ說明をなしてをるが、此說に從ふとヘダテルと云ふ意味からタテと云ふ名稱が出來たと云ふので前說「立て連ねる」の義から起つたと云ふ說と立場が違ふが、私見では「タツ」と云ふ動詞が基礎となり、それにへと云ふ接頭辭がついて「ヘダツ」と云ふ動詞が派生したのではないかと思ふ。へ卽ち古代型ぺであるが一體 p を初音とする接頭辭はオーストロアジア語に於ては作因的(コウザチヴ)な作用を語根に扶與する性質を持つてをるものである。卽ち例を擧ぐるとパラウン語に於て yām は「死ぬ」と云ふ意味であるが p がついて pyām となると「殺す」と云ふ意味になる。またモン語に於て ār は「行く」と云ふ意味であるが pār となると「行かせる」と云ふ意味になる。バナル語に於て dây は「持つ」と云ふ意味であるが po'dây は「持たせる」と云ふ意味になる。もし假說として我古代語に於て同じ樣な p を初音とする作因的(コウザチヴ)な造語分子が存在し例へばアシ(足)と云ふ語に接頭辭的造語分子 p、接尾辭的造語分子 t がつき、「パシル」(走る)と云ふ語が出來たと云ふ考へが認められるとする時は(「亞細亞研究」三十卷九號)、「隔つ」も「立つ」と云ふ語根に p が附き、ペタツ→ヘダツとなつたと見て差支へないのではなからうか。「タツ」は「佇立する」と云ふ意味が

あり、歩いてゐるものが遮斷物によつて立止らせる結果になるのが「ヘダツ」であり、結局タツが作因的な形になつたものがヘダツではあるまいか。之は甚だ推測的な考へであるが今の所提案的な意味で述べてをく（なほ次項參照）。

三、ハカリ、ツムガリ

古事記にスサノヲノ命の八俣遠呂智を退治せられ、其尾を切り給ふ時發見せられた刀を都牟刈之大刀（ツムガリノタチ）と記してをる。此「ツムガリ」と云ふ名稱を宣長は「物を利く截斷貌を云言にて今の世の語に豆加理又須加理など卽是なり」と云つてをるが太刀の名稱としてカリと云ふ名稱が附くものの多いことに注意しなければならぬ。卽ち記のアヂシキタカヒコネノ神が喪屋を切伏せる時の劒を「大量」（オホバカリ）と名づけてあり、書紀には同じ條を記して「大葉刈」と云ふ文字を使用してをる。更に書紀の一書に於ては蛇を斷り給ひし劒の名を天蠅斫之劒となし、古語拾遺では之を天羽々斬とし、羽々は古語で大蛇を指すのであると稱してをる。この羽々を眞に大蛇の意なりとすると蠅ハヘもその訛言であることは云ふまでも無い。然し「斬」とか「斫」とかいふ語は一つの行爲を示す動詞ではあるが、之がその行爲を實現するに用ひられる用器の名稱となつたことが考へられる。卽ち「大葉刈」と云つた場合は「葉を刈る」と云ふ行爲よりも實は「刈る」といふ動詞の名詞形となつた

ものカリにハの古形パと云ふ接頭辭のついた形と見る方がより合理的ではあるまいか。記に大量と書いたのは明かに葉刈と云ふ意味で之を表さうとするのが普遍的でなく全部の人が必ずしも之に合致してゐなかつたことを示すものである。さう考へてくるとツムガリと云ふ名稱もカリの濁音化したガリにツムと云ふ接頭辭の附着したものではないかと考へられるのである。自分はカリとかキリとか云ふ語が動詞のカル、キルの名詞形になり、刀物を指す古代名となつたものではないかと認めたいのである。キリは今日では錐と云ふ刀物だけを指す名になつてをる。然しカリの方は鉞を指すマサカリと云ふ語の造語分子となつてをる。マサカリのマサの意味は種々に解釋せられるが書紀の一書に「其斷蛇劒號曰蛇之麁正（アラマサ）」とあり、此アラマサのマサと通ずるものであり、矢張り刃物にちなめる語であらう。

古語拾遺に「以二天御量一伐二大峽小峽之材一而造二瑞殿一」とあり、「天ノミハカリ」と呼ばれたるものは材木を伐りだす斧の類だと見られる。然し此天御量を從來の註釋家栗田、池邊等の諸家は、之を尺度の類であると見てゐる。古語拾遺の註には大御量に對し「大小斤、雜器等之名」と云つてをる。此「斤」はハカリとも訓ぜられるが支那では斧鉞の類を指してをる。谷川士清は「和訓栞」ハカリの條に於て「物の輕重を量るの器のみならず、大小をはかりて用る所の鐇（タツキ）斧鎌の類をも古はさいへる也」と云ひ、溝口駒造氏はその「古語拾遺精義」（一〇六―一〇九頁）の中で天御量をマサカリなりと推定されてをる。卽ち天御量の解釋に對しては、之を計量器と見る見方と之を斧鉞と見る見方と二つが對立してを

る。然し自分の見る所に從へば之は兩說とも正しいのであつてそもそもハカリと云ふ名辭はハカルと云ふ動詞から出たと考へなければならぬ。然るに此ハカルと云ふ動詞はカルと云ふ語、卽ちコルとかキルとかに通ずる語を語根とし、之にハ卽ち古代型パと云ふ接頭辭を附したものではなからうか。卽ちものを計測するには目的物を目切る必要がある。「キル」といふ動作が必須である。キルとかカルとか云ふ動詞を更に作因的（コウザチヴ）にしたものがパカルではなからうか。パと云ふ接頭辭が作因的（コウザチヴ）な性質を持つことは上述した如くであるが、之もその一例ではなからうか。かう解釋して來るとハカルの名詞形ハカリがたゞに計量器を指すのみならず、物をマギルものそれ自體、斧鉞刀の類まで含めて指すのは驚くに足りぬ。

我國語の伐（コ）る、刈（カ）る、斬（キ）る、穿（ク）る等は大體同一系統の言語であり、共に k を初音とする單音綴を語根とし、それにルと云ふ接尾辭的造語分子を附したものと考へられる。從つてその接尾辭の r を除去して考へた場合語根コ、カ、キ、ク等は、オーストロアジア語の左の形態と比較することが出來る。

モン	kut（斬り放す）
クメル	kāp, kāt（切斷する）
Cham	kåḥ（〃）

Sué, Halang, Chrău　koh（〃）

マライ半島原住民　koh（さす）

kuh（殺す）

Churu　kau（切斷する）

Stieng　kat, kŏh（〃）

Bahnar　kăt, koh（〃）

Achin　koh（〃）

Mon　phăkoh（削る）

Lave, Halang　koh（彫る）

參照 Stieng　khah（森の中に路を開く）

モン　kaḥ（剃る）

Khmer　ko（剃る）

（以上スキート・ブラグデンの對照表による。著者はその中幾つかのことなつた語根あるも恐らく同一系統に屬する語根であらうと附記してをる。）

オースロアジア語に於てはカとかコとか云ふ語根に主として t の終音がつき、其點で我國語とこ

となつてをるがマライ半島原住民の中には左の如き種々なる終音あり、必ずしも一定してゐない。

kor, ma-kor　（切斷する）
tĕkál　（切斷する）
ya-keg　（〃）
kus　（離つ）

即ちその一形式は r を終音としてをる。我國語が ka-ru, ko-ru と r を伴ふ形式となり大部分のオースロアジア語の ka-t, ko-t と云ふ形式と似てゐないと云つても必ずしも根本的相違と見ることは出來ないのである。

モン語に於て koh に phă と云ふ接頭辭がつき「削る」と云ふ言葉が生成した如く我國語に於ても karu に pa といふ接頭辭がつき、パカル―ハカルが生起し、ついでパカリ―ハカリなる名詞形が生起したものであらう。幸ひに此推定にして當れりとすれば此名稱は語源的には南方と緣故がある。

四、タ　チ

タチ（太刀）の語義に就ては和訓栞に「日本紀和名抄に大刀をよめり、神代紀に横刀、萬葉集に劒などをよめり、祝詞式に打斷物止太刀とみゆ、截斷の義なるべし」とある。タチと云ふ名稱が「截斷」

タッの義より起るとすると問題はタッと云ふ動詞が如何なる系統のものであるかと云ふのである。南方語に於て次の如き語形が存してをる。

マライ半島原住民	töit, toit（斷つ）
モン	tăt（〃）
Kaseng	tiet, tit（〃）
Boloven, Niahön	tiet（〃）
Khmer	töh

t を初音及び終音とする語根が我國語「斷つ」と極めて類似せることは申すまでもない。「斷つ」の名詞形「タチ」が截斷するものとしての太刀の名稱となつたとすると此名稱が直接で無くとも間接的に南方と類似のあることは「タテ」の場合と同一であらう。

五、ホコ

今の義解に鉾は木の兩端鋭きものありと云ひ、また我國で之を記すに鉾の外に桙と云ふ文字さへ造爲せられ、原始的には木製のものが次第に青銅や鐵の刃を著けたものと發展し來つたものであり、後世に於ても植物製のものが餘程多く普及してゐたことと信ずる。「細矛千足の國」と呼ばれた我上代

に於てホコが極めて重要な意義を國民生活の上に及ぼしてゐたことが想像出來る。そのホコと云ふ名辭が一體如何なる語原のものであらうか。自分は曾つて拙著巴里版「日本語とオーストロアジア語」中の比較語彙第八十二番に於ても此を南海語彙と比較した。今これに少し增補して左に掲げる。

チャム	kapak（斧）hapak（竹槍）
Bahnar	höpak（竹槍）
Dayak	kapak（斧）
Java	kampak（〃）
Malay	kāpak（〃）
マライ半島原住民	kepaṅ（k'paṅ）（刺す）kapōkⁿ, kapak（斧）
Khmer	lompêṅ（槍）
Malay	tombak（〃）

以上の諸語に於て語根は大體 p で初まり、k 時には ng で終り、それに ka 又は lom 又は tom と云ふ接頭辭が附せられ、接頭辭の k 初音は弱まつて時に h となる。母音の o となるのは馬來原住民一例だけで他は皆 a となるが、南方語と我國語との間に一見極めて相似點が多い。

六、ツヾミ

ツヾミが樂器の名であつて之を攻戰具の中に數えるのは少しくそぐはないが古代に於て鼓が戰陣に於て志氣を鼓舞し、行伍の號令用として重要な職分を演じてゐたことは申すまでもない。萬葉集卷二に柿本人麻呂の歌として「大御身に大刀とり佩ばし、大御手に弓取り持たし、御軍勢を率ひ給ひ、齊ふる鼓の音は、雷の聲と聞くまで、吹き鳴せる小角笛の音も荒みたる虎が哮ゆると、諸人の怖ゆるまでに云々」とあり、鼓が軍陣に用ひられし狀を如實に歌つてをる。

古事記神功紀に建内宿彌が御子の爲に答へまつれる歌の中に「此御酒を釀みけむ人は、其都豆美臼に立てて歌ひつゝ釀みけれかも云々」とある。釀酒の如き儀禮を伴へる生産行爲にツヾミが隨伴せることはよくわかるが此場合のツヾミは所謂「太鼓」でなく支那の腰鼓、今日の「ツヾミ」に類せるものでは無かつたかと考へられる。本居宣長は古事記傳卷卅一に「古へに鼓と云しは今世の大鼓のことにて今鼓と云物は鼓の中の一種なり」と云つてをる。此語が外來語であらうと云ふ考へは比較的早くから發生してをる。例へば谷川士清の和訓栞には「都曇の音也といへり。曇をつみとよむは阿曇をあづみとよめるがごとし。唐書に天竺技有二都曇鼓一と見え、白孔六帖に都曇答臘、本外夷樂、都曇似二腰鼓一而小、答臘卽蜡鼓也といへり云々」とある。宣長も前條につゞいて（都曇と云も答臘と云も

其音によりて著たる名と聞ゆ、さて皇國にて都豆美と云は阿豆美を阿曇と書る例などを思ふにもまことに都曇の字音なるべく思はる。然らば皇國に本より有し物には非ず、外國より來つる物なるべければ此大后の御世には未だ有まじき物なるに此の歌によめるはいかに。故つら〳〵按ふに此時皇國に鼓ありしには非ず、此はさきに新羅國御征の時に此宿禰命も彼國にて此物を擊を初て見聞て甚めづらかに所思し今思ひ出でよまれたるなるべし）と云つてをる。然し之に對し全然擬聲語として解釋する人もあり、例へば狩谷掖齋は、箋注和名抄に於て「都都美其音をもつて名を得、都曇鼓亦音を以て名を得、其名適合へるのみ、都曇鼓によつて都々美を名づくるに非ざるなり」と解してをる。蠻人が打鳴らす木鼓の名が佛語で「タムタム」と云ふ名でとほつてゐる樣に、此種の樂器が擬聲語であることは首肯し得るがツヾミの語原はそれだけでは片附かず、今少し愼重な研究を必要とする。

大言海は後說をとり、つゞみの條に「音を以て名とす。唐の天竺伎に都曇鼓あり、字音を以て云ふ。暗合なり」と云つてをる。同書によるとつゞみを二種に分ち、一は胴に革を張つて擊ち鳴らす樂器の總名とし、今俗の太鼓を指すとし、之に對し今一つは腰鼓を指す名とし、その古名を吳鼓又は三の鼓としてをる。その形は同書によると「櫻の材にて胴を作る、中括れて內空し、別に猿の革を鏡の如く張れるものを胴の兩端に添へ、調べの緒を以て革の端に貫きて胴にかゞり締む、左手にて緒を締めつして調べを取り右手にて擊ち鳴らす、形に因りて大つゞみ、小つゞみの別あり」とある。古代に

於てツヾミは廣く鼓類の總名であつたので和名抄には鼓の種類に大鼓（於保豆々美）、揩鼓（須利都々美）、鞨鼓、鼗鼓（不利豆々美）、腰鼓（久禮豆々美）の五種類を擧げてをる。今日俗にツヾミと云へば大言海の擧げた第二のもの、卽ち腰鼓、一名吳鼓（クレツヾミ）を指してをることは云ふまでもない。たゞこの腰鼓がその名の示す如く吳卽ち江南地方より我國に流傳したるが如く考へられるがかく外來の特殊形の鼓に對してのみツヾミと云ふ名稱の使用が限局せられたことには何等かの理由あるべきことであり、必ずしも外來語が從來の呼稱に符合してゐたとかまた共に擬聲語であるとのみ解して滿足し得ざるものがある。

一體吳鼓型の樂器が如何なる原型より發達したかは人により意見が分れて一定してゐない。然し之を瓠の形から說明する佛のプシルスキイ敎授の說があるのに注意してをかう。卽ち氏は此形式の樂器は二つの脹みある瓢簞の兩方の圓部を兩斷し半圓だけ殘したものと解するのである。この氏の所謂砂時計型樂器はマーラッタ語で ḍamru ヒンデゥー語で ḍamrū と呼ばれてをる。卽ちその名稱の語根に ḍam と云ふ形を有してをるのである。この ḍam はプ氏の意見によれば瓠の名より起原したのであると云ふ。卽ち同氏の「パンジャブの一古代住民ウドゥンバラ」（佛國亞細亞協會雜誌一九二六年一・三月）中に於て次の如き意見が表白せられてをる。「曾つてオーストロアジア語族の語形に *ṭumba と云ふ形式の葫蘆科の植物を指す語根あり、それがインド・アーリア語族にも影響を及ぼし、各種の瓠類を指す名の淵源と

なつた。卽ち一種の葫蘆科植物の實コロシント coloquinte を指す梵語名 tumbā, tumbī, tumbuka の如き語形、ficus glomerata を指す udumbara の如き語を生み、引いては各種の樂器、前述の ḍámru の外に梵語、ベンガル語で ḍamaru と云ふ小鼓、マーラッタ語で二つの瓠が共鳴器として下つた管からなつた一種の琵琶 tambūrā, また音樂と歌謠とをもつて世すぎとする梵語で ḍomba と云ふ卑賤階級の名などを誘起したのであらう」と云つてをる。同氏の意見が悉く正しいかどうかは暫く置き、腰鼓の祖原として考へられる樂器の名に葫蘆の名より由來したと云ふ說あることに注意しなければならぬ。卽ち ḍam と云ふが如き語根の樂器名稱に接頭辭 t が著くか、又は半ば疊語の構成が行はれたものとして toḍam 又は ḍaḍam と云ふが如き形式が曾つて存し、それが漢字により都曇鼓と轉寫される名稱の起原になつたのではないかと想像される譯である。都曇鼓については唐書禮樂志に「天竺伎有二銅鼓羯鼓都曇鼓毛員鼓一」と云ひ、「龜茲伎有二荅臘鼓毛員鼓都曇鼓侯提鼓雞婁鼓腰鼓齊鼓擔鼓一」ありとあるので之が印度傳來の樂器であることは推定される。そして都曇の古代音は *tuo ḍâm であつたと考へられ、自分の推定した *toḍam と云ふが如き形と近い。また形式も舊唐書音樂志に「都曇鼓似二腰鼓一而小以レ槌擊レ之」とあり、之が「廣首にして纖腰、兩頭之を擊つ、聲相應じて和す」と云ふ腰鼓の類であることは申すまでもない。現代支那に於ては杖鼓と云ふ名によつて指稱されてをるものが之に似てゐる。

高楠博士は日本外來語辭典にツヾミの語原を梵語 dundubhi 巴利語 dudubhi なりとされ、田邊尚雄氏は大百科事典ツヾミの條に「東洋各國に行はれる打樂器、廣義には鼓類の總稱で我國上代には主として其意味に用ひられてゐた。しかし其名稱は元來印度語 Dudubhi 又は Dundubhi の當て字で印度の胴の小さい鼓を指したものらしい。吳鼓または腰鼓と稱するものは伎樂に用ひられるもので、これは印度系の鼓であつた。支那にて都曇鼓といふ名稱も此印度語の音譯である云々」と述べられてをる。所が此田邊氏の意見はザックスの印度樂器に關する記事と合はぬ。卽ちザックスによると梵語及び巴利語で dundubhi と云ふのはベンガール州に於て nâgârâ と云ふ鍋型太鼓 Kesseltrommel を指し皮に直接結ばれた締め紐を第一の帶までチグザグに交叉させ、次いで第二の帶まで直下せしめて結ぶ半球形の鼓を指し、けして所謂ツヾミ形のものを指してゐない (Sachs, Die Musikinstrumente indiens und indonesiens, Berlin, 1941. S. 59.)。飜譯名義集にも Dundubhiḥ 大鼓とあり、都曇鼓、卽ち腰鼓形のものとは關係なしと見るべきであらう。一方都曇鼓の方は一切經音義に小鼓也とあり、Dundubhiḥ とはことなるものと考へられる。

しかし我國に於て古く大鼓をツヾミと云つてをるのであるから或は梵語か巴利語が影響したとも見られるが、一體大鼓の如き樂器は印度から特別な發達した形式が輸入せられたことは考へられるが原始的な太鼓型樂器は印度輸入以前から我國に存在したことが想像出來る。神功紀の歌が後世の作であると認むれば兎に角さうでない限りツヾミの名は我國に於て極めて古くから存在したと認むべきであ

らう。印度語に於て鼓の名稱が瓠名と關係ありと云ふ說がある樣に我ツヾミも之を全然擬聲語として見ることの出來ぬ疑ひが濃厚である。

我國に於て瓠を「ツボ」と呼ぶ習慣がある。卽ち和名抄調度部音樂具笙の條に「釋名云、笙、竹之母曰レ匏、以レ瓢爲之、竽亦是、其中受レ簧」とあり、笙の底部、瓠をもつて形成せられる匏を俗に「都保」と云ふとある。此ツポと云ふ名稱は壺ツボとが靫ウツボとかツボミとかツボマルとか女陰ツビとか云ふ言葉と關係あるらしく、また、粒ツブとか圓ツブラとか頭ツムリと云ふ語とも關聯を持つてゐる樣に考へられる。琉球でも瓠を tsiburu 卽ち頭と同樣の名辭で呼んでをる。丸い中空ろな果實殼と圓い容器とは等しく同じ名で呼ばれてゐたことが推測出來る。我古語に於てべと呼べば甕を指す名であるが其れが同時にフクベの如き果實の名の接尾辭的分子として用ひられてをることを參照すべきである。

さてオーストロアジア語オーストロネシア語共通に瓠を次の如く呼んでをる。

マライ半島原住民	labu, labo
Khmer	lbow
Batak	tobu
Malgache	tabu

その外馬來人は Cucumber を timun マライ半島原住民が sětemun また瓠のことを tabong などと呼んでをる。プシルスキイ教授がオースロアジア語の葫蘆科植物を指す *tumba と云ふ語根の存在を假定したことは前述の通りである。これらの名稱と我古語のツボとは極めて相似てをることが認められる。匏をツボと俗に云つたのは或はごく遠い古へから瓢簞を指す南と共通の言葉から出たのかも知れぬ。さうすると次の事が想定されてくる。ツヾミと云ふ名稱で鼓類全體を指してゐたのが吳鼓を指すためのみに限定されて來たのには吳鼓が都曇鼓と云はれてゐたことのみならず、恐らくは吳鼓の形に葫蘆を中斷した形を聯想したり、また中間のつぼまる形からツボとかツブルとか云ふ名稱と聯關して考へたことが理由とされるのではなからうか。そして都曇鼓と云ふ名稱自身も上述の如くオーストロアジア系の言語であつたかも知れないのである。

結局邦語のツヾミと云ふ語の語原は從來の通說の如く之を外來印度語とも又は擬聲語とも簡單に解釋つかざるものあり、或は最初から中空ろなる容器を指すツボ、ツブ、ツミ系統の名稱が半ば疊語的にツ・ツミとなつたのが廣く鼓類を指すツヾミなる名稱の起原となつたものではなからうかとも考へられる。

そしてその中空ろなるものを指すツボ系統の名稱は結局南方語と共通にもと葫蘆を指す名であつたのではなからうか。ツヾミの語原は極めて復雜で自分の意見が之を解釋し去つたとは毛頭思はない。

たゞ私見を述べて從來の通說と考へられてをるものに若干の疑ひをさしはさんで置く。